

「震災の翌日から矢継ぎ早に非常用ろうそくの注文が集まった」。そう振り返るのは、同社の新庄哲三社長(53)だ。従来は寺社や葬祭業者など、業務用を中心いろいろそくや線香を製造していく同社だが、関東地方で

古くから日本人の生活になじんできたろう。そく、亀山市川崎町のろうそく製造業、アシベ工芸の「復興祈願ろうそく」が、注目を集めつつある。従業員三十人の町工場に訪れた転換点は、東日本大震災だった。(久野賢太郎)

アシベ工芸のろうそく



高野山の寺などに置かれている復興祈願ろうそく(図)などの和ろうそく=いすれも龜山市川崎町のアシベ工芸で



う振り返るのは、同社の新庄哲三社長(六〇)だ。従来は寺社や葬祭業者など、業務用を中心いろいろそくや線香を製造している同社だが、関東地方で

流行のつぼ

計画停電が始まると、あ
従業員と新庄社長に違和
つという間に在庫は空つ
感だけが残った。
ぱに。フル操業での生産
が始まった。商品が売れ
ることは会社にとって良
いことのはず。でも、その
原因が災害となると事情
は異なる。降って湧いた
ような特需に「なんか違
う」。被災地に何かした
いと義援金を持ち寄った
新庄社長は、寺や神社
にある献灯台に着目し、
以前から取引のあった真
言宗の總本山、高野山金剛峯寺(和歌山県)に持ち
込むと、境内の献灯台前

まつた。参拝客が円で購入し、献灯をともす。売り上部は、同社と寺に贈られる仕組の支援につながり、拝客の関心を集め、広がりつつある。

が一本百が今
灯台で灯上げの一のは
から東北の士
みだ。「心も二
量を
る」と参
め、支援イニ
の寺院へてき
る缶入り
の庄文
た。
商品

全国から舞い込む中
頗るうそくが実現し
は震災から一ヶ月半
八月だった。これま
一酸化炭素(CO₂)排
を7~10%削減した
ニア商品などを開発
された同社が、今回も
品をスピード開発
「社員はよく頑張つ
れた。こういう機動

が、小さな会社の良い所」。新庄社長は胸を張る。
非常用ろうそくの増産
態勢は今も変わらない
が、祈願ろうそくの生産
も続ける。新庄社長は「葬式や仏壇のろうそくは、
亡くなつた人の足元を照らす明かりや、子孫が暮らす家の目印という意味
がある。復興祈願ろうそくには、日本の復興への道筋を照らしてほしいと
いう意味も込めた」と拳を握りしめた。

急ピッチで生産される非常用ろうそく